

地域の寄り合い所 また明日

2233038 下田 いずみ

実習場所：NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日（小金井市）

参加人数：4名

学部学科：人間科学部 社会福祉学科

実習期間：令和4年8月8日～8月26日



・地域の寄り合い所「また明日」について

<地域の寄り合い所「また明日」とは>

ひとつ屋根の下で、デイホーム、保育園、寄り合い所(注1)の3つの事業を行う多目的福祉施設(注2)で、年齢や性別、障害の有無や国籍の違いなどを超えて誰でも利用することができる。デイホームは、認知症対応型であり、程度の差はあるが、認知症の症状を抱えた方が利用している。

(脚注)

1 年齢に関係なく、誰でも利用できる。

2 複数の役割をもった福祉施設。

<実習を通して>

「また明日」で実習をしている中で、小学生やアルバイトの高校生が小さい頃から来ているという話をたくさん聞いた。この施設のよい点は、年齢や性別、障害の有無や国籍の違いに関わらず、誰でも利用することができるという点だと思う。特に、デイホームの高齢者にとっては、「また明日」の職員の方や、同じようにデイホームに来ている高齢者の方々と子どもたちの成長を見守ることができ、それが生きがいになっている人もいないのかと感じた。

また、園長先生から聞いた、「デイホームでは、少なからず認知症の症状がある人を受け入れているが、その人たちが主体的に過ごせるような環境づくりを行っている」という点もよい点だと感じた。その環境づくりというのが、過ごす場所を限定しなかったり、やることを強制しなかったりする環境である。一般的な介護施設では、職員の都合によってやる事が決められていたり、強制されたりする場合があるが、これでは認知症の症状を進行させてしまうことになる。それに対して「また明日」では、小さい子どもたちを見守ったり、一緒に遊んだり、歌を歌ったりするなど、好きなことをすることができる。そのため、実習をしている中で利用している方々が少なからず認知症の症状を抱えていることは分かっていたが、ほとんど感じることはなかった。このことから、「また明日」のような要介護者の主体性を尊重する考え方はとても大切であり、この考え方をこれからの学びに活かしていきたいと考えた。

・認知症の症状を抱えた高齢者（Aさん）との関わり

<Aさんの特徴と実際にあった例>

Aさんは、不愉快なことがあったり、思い通りにいかなかったりしたときに怒りだしてしまう。例えば、歌を歌っているときには、早く次の歌を歌いたいという気持ちが先走ってしまって、歌詞カードを回収したり、配ったりしている間にイライラとしていた。さらに、小学生と高齢者の方々と一緒にババ抜きをしたときには、自分のカードが全然そろわないと「どうせズルしているのだから」と怒りだして、最終的には参加しなくなってしまった。

<Aさんの症状>

認知症の症状として、記憶障害、見当識障害、理解力や判断力の低下、行動・心理症状などがある。その中でもAさんは、怒りっぽくなる、イライラする、些細なことに腹を立てるなどの心理症状が強いと感じた。

<Aさんと接して感じたこと>

私は、Aさんはよく分からないときや上手くいかないときに気持ちがコントロールできなくなってしまっているのではないかと考え、できるだけ優しく丁寧に声をかけることを心がけた。実際に実習の中で、職員の方も「ゲームだから仕方ないですね」と優しく言っていたり、私も、「もう少し待ってくださいね」と言ったりしたら、少しイライラが軽減されていたように感じたからだ。また、イライラしてきているなと感じたら上手くAさんが興味のあることに誘導するとよいと感じた。

例えば、次の歌詞カードがすぐに配られないなと思ったら、その前に歌った曲について聞いてみたり、「次の曲は何でしょう？」と聞いてみたりするなど、違うことを考えられるようにすると楽しそうに話してくれた。Aさん自身も、感情がコントロールできなくて、そのことに対する怒りも混ざっているのではないかと考えられるので、周りの人がそういうこともあるということを理解して声をかけるのがよいと考える。



<まとめ>

実習を通して、地域に年齢や性別、障がいの有無や国籍の違いなどを超えて、誰でも利用できる場所の大切さと温かさを感じた。地域のみんなで子供たちの成長を見守っていくことで、高齢者の生きがいになったり、子どもたちにとっては様々な人たちと交流する機会になったりしており、相互により影響を与えているのではないかと考えられる。

小金井市 地域寄り合い所「また明日」

2233041 人間科学部 社会福祉学科 高橋佳乃子

プログラム概要

- 1, 小金井市にある NPO 法人「地域の寄り合い所 また明日」の活動、子どもからお年寄りまで参加する地域コミュニティーを学び、集うことを通した地域貢献を学ぶ。
- 2, 小さな子どもをもつ母親の集いの場所、軽度認知症の居場所として福祉的な NPO 法人の活動を学ぶ

実習先

NPO 法人 地域寄り合い所 また明日

〒184-0014 小金井市貫井南町4丁目14番14号ヴィレッジパル1階

実習期間： 2班令和4年8月29日(月)～9月16日(金)

1 また明日の意義

[また明日について]

また明日はひとつ屋根の下で、認知症の方のデイホーム・認可保育園・誰でも気軽に立ち寄れる寄り合い所の3つの事業を行う多目的福祉施設である。これらに合わせて地域の世代を超えた様々な関わりつくりに取り組んでいく。

[また明日の意味とは]

何気なく交わす「それでは、また明日」という言葉には、「明日もがんばりましょう」といったエールの交換、明日という未来への希望、今日という日を互いに無事に過ごせたことへの喜び、感謝の想いが込められている。その想いが広がり、「あの子、あの人、あのお年よりは今どうしているだろうか？元気だろうか？」と、誰かを思いやる心の余裕が生まれるように、「NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日」がそのきっかけのひとつとなれたら、という意味。

子どもと触れ合っている時や世話をしている・されている時は、高齢者の方と子どもの自然な笑顔を拝見することができました！



2 活動を通して

[Aさんの特徴]

- ・会話に参加できていないと感じる・声が聞こえない＝疎外感を感じてしまうとイライラ
- ・職員の方が薬を飲むのを手伝おうとした＝何から何までしてもらったことにイライラ
- ・自分がうるさいと感じると暴力的な発言が出てしまう

[Aさんの特徴から考えられる認知症の症状]

- ・認知症になると初期のうちから些細なことで怒りっぽくなり、すぐに怒鳴ったり、他人に攻撃的な発言をしたりといった症状が出る場合があります。怒りっぽくなって人格が変わったように思えることがある。これは「易怒性（いどせい）」という認知症の症状である。

[Aさんに対する接し方]

- ・本人に合わせて行動する ⇒Aさんが自分からみんなで話している中に入っていったら、その話題を振るなど。常に様子を伺いながら
- ・否定・強要しない ⇒本人のことを否定したり、イラついていることに対して怒ったりするのは絶対にしない

↓

子どもに折り紙の折り方を教えている時は、とても楽しそうに優しく教えてくれた自分の優れている部分を発揮できる・見せられることに自信をもっている。

3 体験を通して

[感じたこと]

高齢者の方々にとって子どもたちや地域の方々にも囲まれながら生活することにとっても良さを感じました。自分の孫のような子どもたちとの生活は高齢者の心を癒し、穏やかな時間を過ごすことができると思いました。また子どもたちにとっては高齢者の方々とも生活することで、人を思いやる気持ちが培われていくのではないかと思いました

約2週間の実習を通して、また明日の方々には「あいさつ」をよくしていることに気づきました。地域の方々ともあいさつを交わすことで自然と信頼関係を築き上げていくことができると思いました。園の方だけでなく、あいさつを交わしていた地域の方々にも暖かさを感じました。



○デイホーム…介護を要する高齢者・認知症の老人などを昼間預かり、治療・介護などを行う施設

○易怒性 …些細なきっかけで怒りだしてしまう、イラついてしまうこと

実習先：NPO 法人 地域の寄り合い所「また明日」

実習期間：令和4年8月8日～8月26日



1 「また明日」について

・また明日とは

また明日は地域の寄り合い所として、地域の方が気軽に立ち寄れるような「場所」である。①認知症対応型デイサービス事業 ②認可保育園 ③独自の地域福祉事業の3つの役割を年齢・性別・障害の有無・国籍を超えて誰もがいられる一つの場所になっている。

・実習内容

今回「また明日」に参加するにあたり、お年寄りから小さな子まで地域の誰でも立ち寄ることができるという中でお年寄りと子供がお互いに与えあう影響や地域の支えあいということに焦点を当てて参加した。具体的な活動として基本的に子どもの見守りやお年寄りの方とのお話、その他の活動の準備・手伝いなどを行った。

2 実習を通して学んだこと

・介護とは

「また明日」では高齢者の方への介護というものへの認識を大切にしていると感じた。介護とは、お手伝いをするのではなくお年寄りの方が主体的に動くことをサポートすることだと学んだ。お年寄りの方に負担がかからないように過ごしやすくすることに目が向いてしまいがちな介護を、お年寄りが主体的に動くことを第一に考え、そのためにどのようなサポートをするのが良いのかを考えていた。できることを奪わずできることを見つけるという視点が大切だと学んだ。

・お年寄りの方（Aさん）と関わって

『Aさんの特徴』

Aさんは自分の中でのこだわりが強い方だと感じた。周りの方の過ごし方などが気になって落ち着きがなくなってしまうたり、怒りが出てきてしまったりすることがあった。また落ち着きがなくなってしまうと時間が気になり、帰る時間を頻繁に確認することが多くあった。子供に対しても違った遊び方をしていると気になることがあるように感じたが、子供のことをよく気にかけていて子供が好きであることを感じた。



『Aさんと認知症』

認知症の症状の一つである「BPSD（周辺症状）」は認知症の症状や環境などが原因となって、不安や苛立ちを感じ、行動や心理症状として現れるものである。具体的な現れる行動として徘徊・せん妄・帰宅

願望などが挙げられる。AさんにBPSDが出ていたと考え、時間や場所がわからなくなることから混乱した状態になり感情が激しく出ることや不安から落ち着かなくなり時間を気にする行動が多くなっていたのではないかと感じた。

これらを踏まえてAさんに安心感を与える行動として、日常的に安心できるように施設の環境の変化を少なくすることや生活リズムを一定にすることがあげられると考える。具体的な行動として、落ち着かなくなった時には単純に時間を伝えるのではなく帰るまでの予定を伝えること、洗濯物をたたむなどの作業や手伝いをしてもらうことなどからAさんの安心や自信につながると考える。

・子供とお年寄りとの関り

小さい子からお年寄りまでいる「また明日」ではお互いにとても良い影響を与え合っているということを感じた。お互いに与える影響について「子どもからお年寄りへ」「お年寄りから子どもへ」という二つの視点から考える。



「子供からお年寄り」の視点では、子どもが自然にお年寄りへ笑顔を与えているということである。同じ「場所」で過ごす中で子どもの遊び、成長を身近に見ることができ、心の穏やかさにつながっていると感じた。さらに子どもの世話や遊びの手伝いをすることでやりがいや自信にもつながっていると考えた。私が実際に参加して、粘土や折り紙を子供に教えている場面をよく目にした。このように子どもが身近にいれば気づくことのできない強みなどを見つけることができることはとても大切なことだと考える。

「お年寄りから子ども」の視点では、お年寄りの方に遊び方などを教えてあげることや逆にお年寄りからたくさんのお話を教えてもらえる機会があることがあげられると感じた。実習をした中で小さい子だけでなく小学生のお年寄りとの接し方が印象に残った。普段からお年寄りの方のかかわりの機会があることから、お年寄りの方が安心するような口調での話し方や行動が自然にできていたように感じた。



3 まとめ

今回「また明日」の実習を通して、お年寄りに対する接し方や子供に対する接し方、お年寄りと子どもの関係性、地域のつながりの重要性を学ぶことができた。また福祉という分野を学んでいく中で、広い視点や様々なつながりを見つけていくことが大切だということも学んだ。お年寄りに焦点を当てた支援、子供に焦点を当てた支援だけでは得られない発見や地域の方と協力することで生まれる関係性、取り組みがあることを感じた。このような広い視点での支援や本当の意味での介護ができるように学んでいきたい。

*独自の地域福祉事業：誰でも立ち寄り、集うことのできる、地域の交流スペース